

母の碑

いしおみ

岡子英雄



新潮社

母の碑^{いしおみ}



新潮社

◆著者略歴

昭和八（一九三三）年、愛媛県生まれ。
大分大学経済学部卒業。幼少年時は
魚捌いと野鳥の飼育に、中学・高校
時代は野球とボクシングに熱中、大
学二年の時から詩作を始める。新聞
社勤務のかたわら小説も執筆し、昭
和六三年、「カワセミ」で第一九回
新潮新人賞を受賞した。著書に小説
集『カワセミ』（新潮社刊）など。
松山市在住。

母の碑
はは いしぶみ

平成四年 一月二〇日 発行

著者 関子英雄
（せしごゆう）

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一

郵便番号 一六二

電話（業務部） 03-3266-5111

（編集部） 03-3266-5411

振替 東京四一八〇八

印刷 大日本印刷株式会社

製本 加藤製本株式会社

価格はカバーに表示してあります



© Hideo Zushi 1992,
Printed in Japan

（乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛お送り）
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-374302-6 C0093

目次

第一章 遺髮	5
--------	---

第二章 石白	58
--------	----

第三章 笹百合	149
---------	-----

装
画
香
月
泰
男

母
の
碑^{いしぶみ}

第一章 遺 髪

一

昼前から強まってきた風に校庭の櫟けむきが身もだえして、枯葉を散らしている。鐘の柄を握る手が冷たい。梶サナエは風に音を消されないように、午後の授業開始を告げる本鈴を力をこめてゆつくり鳴らした。いそいで教室に駆け込む数人の生徒たちの姿がみえた。

空気が乾燥していて、鐘の音は狭い校庭のすみずみまで響きわたり、すぐ周囲の山々から分厚く膨らんだこだまとなって返ってくる。こだまはいつ聴いても柔らかく、かさなり合った人の呼び声に似たぬくもりを帯びている。消えてゆくこだまを習慣的に耳で追いながら用務員室に引き返す途中で、サナエは若い配達夫から郵便物の束を受け取った。雑誌や私信にまじって、珍しく彼女宛の書留が来ている。茶褐色の幅広い公用封筒で、受取り書に判をつき、裏を確かめると、総理府恩給局から出されていた。サナエは鐘を用務員室に置き、二階の職員室に上がった。一人だけ残って答案の採点をしていた黒瀬教諭にほかの郵便物を手渡し、ストーブのそばの木椅子に浅く腰かけて書留の封を切った。

封筒の中には、遺族年金の交付通知書と年金証書が入っていた。一瞬、自分の目が信じられなかった。

証書には、遺族の登録番号や支給額が記入されている。通知書をひらくと、このたび軍人恩給が復活し、来年二月一日から遺族年金を年四回に分けて支給するから最寄りの金融機関か、郵便局で受領されたい、との趣旨がしるされていた。小さな活字で注意事項も書き添えられていたが、彼女はしまいまで目を通せず、黒瀬のところへ駆け寄った。

「黒瀬先生、これ見てください。私も年金がもらえるんです」

「ほう、年金が？」黒瀬は受け取って書類に視線を走らせていたが、
「こりゃ、吉報だね。よかったじゃないか、おばさん」と声を昂ぶらせて、椅子から立ち上がった。

「おかげさまで……。あんまり思いがけない報らせなので、夢じゃないかと」

「中佐ともなると、大したもんだな。切り詰めたら、それでなんとかやっていけるよ。何もこんな山の中で、あくせく気を遣って働くことはない。年金が支給されるようになったら、小使いを辞めて療養に専念するんだね」

黒瀬は書類をサナエに返した。この春、小学校の部に転勤して来た彼は、サナエの身の上を詳しく知ってはいなかった。

「療養のことより、私には息子の供養のことが気がかりなんです」とサナエは言った。「年金はしばらく手をつけずにおいて、それに貯金を足したら、どうにか人さまに恥しゅうない墓が建て

てやれます。その目途がついたのが嬉しくて」

「そうか、墓はまだなかったのか。顕彰碑の二つや三つはとくに建っているものとばかり思っていたが、空騒ぎに終わっただけなのか。世相も落ち着いてきたというのに薄情なものだな、まったく。ぼくはね、終戦の年、師範の一年だったが、授業は二カ月足らずで打ち切られ、軍需工場へ勤労働員で駆り出されていたんだ。梶中佐のことは学校でも、工場でもずいぶん聞かされて発奮を促されたものだった。しまいには耳にたこができて、内心反発しないこともなかったがねえ。……ところで、おばさん、息子さんが戦死してどれくらいになる？」

「九年と、十日ほどです」

「さすがによく覚えているなあ。もうそんなになるのか」

サナエは黒瀬の言葉に、埋めがたい他人とのへだたりを覚えた。かすれた笛のような音をたてる風が、ガラス窓を引つ掻いている。彼女は木椅子に腰をおろすと、ストーブに薪を継ぎ足した。まだ生乾きの櫟の薪は樹液をにじませて燻りつつ燃えひろがり、ストーブの火勢を煽りたてる。サナエは年金通知書の注意事項を読みおえ、出張中の渡良井校長が帰って来たら、さっそく報告しようと思った。

たしかに、これは夢ではない。けれども、年が明ければ十年になる。早く墓碑建立の手がかりをつけておかないと、昭夫に顔向けができない。その思いをあらためてかみしめると、鈍い痛みをともなった焦躁が胸を走った。

*

昭和十九年十月二十八日の宵であった。西条市氷見の芝居小屋を兼ねた映画館の片隅でニュース映画を観ていた梶サナエは、木戸番の老女に自分の名前を呼ばれ、いぶかりながら観客のまばらな枱席を抜けて、おもてに出た。燭光のとぼしい明りの下に、従弟の小寺庄市が野良着姿で立っていた。

「サナさん、ちょっと」庄市は待ちかねたように寄って来ると、挨拶抜きで言った。陽焼けした、顎ひげの濃い顔がこわばっている。

「おおごとじゃ、昭夫さんが……」

サナエは、とっさに声が出なかった。鋭利な剃刀で背すじを切り裂かれるような冷たい予感が走った。庄市は彼女をせきたて、肩に手をかけて館外の道端に連れ出したが、立ち止まると、興奮を隠せぬ早口で言った。

「な、気をしっかり持って聞いとくれ。昭夫さんが敵の空母に体当たりしたんじゃ」

「体当たり？」

「さっき、ラジオで聴いた。なんでも特別攻撃隊の隊長とやらで……」

サナエの耳は、あとの言葉を受けつけなかった。後頭部を思いきり棍棒で殴られたように頭が痺れ、目の前が真っ暗になった。喉が詰まって、口もきけない。灯火管制をした家並みがぐらっ

と傾き、なだれるように心にかぶさってきた。

昭夫が敵の空母に体当たり？ そんなばかなことが……。きつと何かの間違いだ。

「えらい手柄じゃ。なんせ、五機の戦闘機で敵の空母を二隻か三隻、沈めたちゅうけんなあ」

庄市のうわずった声が煩わしく、腹立たしい。膝から力が抜け、その場にしゃがみ込みそうになるのをかろうじて休えた。映画館の裏手から溝に沿うた小路を離れ家まで、どのようにして戻ったのか、サナエは覚えていない。

家に近づくと、しぜんと小走りになった。胸のなかにえたいの知れない大きな塊りが詰まっ
ていて、呼吸をふさぐ。

明りのついてない暗い居間の框かまちを上がろうとして、足をすべらせ、ちよつとよろけた。あとからついて来る二歳下の従弟の目に、醜態をさらすまい、昭夫の戦死はとうから覚悟していたこと
じゃないか。そう自分を叱つても、体がいうことをきかなかつた。

ラジオは怖くて聴きたくない。が、聴かずにはすまされなかつた。明りをつけ、ラジオのスイ
ッチをひねる掌が顫えた。心臓が振じ切られるような恐ろしさに、息もつけない。

しばらくして、大本営発表の臨時ニュースが雑音まじりで耳にとび込んできた。ニュースはフ
イリピンで神風特別攻撃隊敷島隊が未曾有の戦果を挙げたとして、隊長の梶昭夫大尉以下、
四隊員の階級、姓名がアナウンサーのよく透る早口の声で読みあげられた。功績をたたえる豊田
副武連合艦隊司令長官の布告が、そのあとにつづいた。

やはり、誤報ではない。サナエの耳は、息子の戦死という事実しか聴き取らなかつた。鼓膜が

麻痺し、ほかの言葉を受けつけないのだ。気がつくとき、サナエは両手で耳を覆って、うつ伏せになっていた。

庄市はうろたえて抱き起こそうとした。サナエはかすかに首を振って、言った。

「庄さん、すまんけど、ラジオと明りを消して」

庄市が言われたとおりにすると、二間きりの借家は宵闇と重い沈黙がひたした。虫の声にとり囲まれた肌ざむい部屋の中で、サナエは上体を折りまげ、額を畳にすりつけて背中を波うたせた。庄市はなすすべもなく、茫然としていた。

昭夫がひと月あまり前、台湾から最前線のフィリピンに赴任したとき、もう生きて戻れそうにない、とサナエが諦めの気持を披瀝していたのを、庄市は記憶していた。その昭夫が真珠湾攻撃の九軍神をしのぐ手柄をたてて戦死したのだ。

彼は最初にニュースを耳にしたとき、息が止まりそうな衝撃を受けた。とてもじつとしてはおれない。妻のシズと相談して、とりあえず知らせに行こうと、海辺の蛭子集落から四キロの道のりを自転車で駆けつけて来たのだ。サナエがおどろき、悲しむだろうとは予期していた。けれども、明りを消した部屋で上体を折りまげ、嗚咽に似た息づかいを懸命に押しこらしている気配を察すると、後悔に胸を咬まれた。

いずれ、わかることだから、軽率に報告者の役割を買って出るべきではなかった。気丈で辛抱強いサナエがこれほど激しい悲嘆に打ちのめされようとは、庄市の予測を超えたことだった。慰めの言葉もみつからぬまま、途方にくれて坐っていると、玄関にシズの訪れた声があった。シズは

土間を通り、上がり框の暗さに戸惑いながら居間に入って来た。明りをつけ、身づくろいして坐りなおしたサナエに、「聴いたんじゃね、ニュースを」そう問いかけながら、手を取った。「サナエさん、うちはなんも言うわん。つらからうとも、昭夫さんがようやったとも、うちには言えん。……ほじゃけど、つらいのを我慢しとるんじやったら、遠慮せずにお泣き」

サナエの体がくずれた。稲の取り入れのさなかで、汗と泥の臭いをしみ込ませたシズの太いモンペの膝が鼻孔を刺戟し、喉が搾るようにくくつと鳴ったが、涙は出なかった。

「胸が、きつうて……」

サナエは訴えた。大本営から発表された以上、戦死は疑えなかった。が、母親の本能はそのことに打ちのめされながらも、まだ実感として受け止めかねていた。昭夫はほんとうに体当たりをしたのか。なぜ、体当たりしなければならなかったのだろう。堅い空母の甲板に粉微塵になって。いったいどうして、聞くさえ身の毛のよだつ、そんなおそろしい死に方を選んだのだろう。

思考が停止したような脳裏を、怨みがましい疑問が充たした。

昨夜の出来事が思い出された。近所から頼まれた和裁の仕立て直しに根をつめて、坐ったまま、ついまどろんでいたらしい。裏口の戸があく気配がした。不審に思って確かめに行くと、思いがけなく飛行服姿の昭夫が突っ立っていた。顔が土気色でぎらぎらと目を光らせ、びっしり汗をかいている。

「まあ、びっくりした。暑そうじゃね。そんなとこに立つたらんで、早よ家へお上がり」

サナエは近寄って、息子の手を取ろうとした。すると、昭夫は子供のときによく見せた、いや

いやをするしぐさを残して後ずさりし、ふっと闇に消えた。サナエは狂おしく息子の名を呼び、自分の声の大きさにおどろいて目が覚めた。激しい動悸を抑えられぬまま、裏口に出てみると、戸締まりしたはずの古い開閉式の木戸が半ば開いていた。夢のなかの昭夫は、ひと言も口をきかなかった……。

そのためサナエは、ゆうべはひと晩中まんじりともせず、きょうも胸騒ぎがして、映画館の暗がりに身を置いても落ち着かなかったのだった。

玄関の戸が開き、聞き馴れた声がした。家主の宝井修造と妻の菊枝だった。庄市とシズが応対しているあいだに、サナエはいそいで顔を洗い、身仕舞をととのえた。すでに彼女は、いやおうなく特別な照明を当てられた舞台に引き出されていたのである。悲嘆に身をゆだね、自分の殻の中に閉じこもるには戦功が華々しすぎた。

「このたびは、ご子息があつばれな武勲を立てられましたそうで……」

世馴れた初老の家主も口ごもった。菊枝も語尾をにごして頭をさげた。家主夫妻は招じられて、居間に上がった。女たちは居間の家具や裁縫台を片づけて隣の部屋に運び、卓袱台ちゃぶだいに白布をかけて急拵えの祭壇を仕立てた。鴨居に掛けてあつた中尉時代の第二種軍装に身をかためた額入りの写真が、遺影として土間の正面向きに飾られた。

そのうち、知人や隣組の人たちがつぎつぎと駆けつけて来る。サナエと昵懇な村川美保子も心配そうな顔を見せた。美保子は隣接の小松国民学校の女教師で、四十六歳のサナエよりちやうど十歳年下であった。

褒賞をこめた悼みの言葉や、仰々しい多弁な称讃が並べられたあとには、どう言っているのかわからず黙って丁寧にお辞儀をして帰って行く人など、つねとは違った弔問が夜遅くまでつづいた。

最初の戸惑いが去ると、サナエは袷の襟もとをきつちりとかき合わせ、端座して言葉少なに應對した。

……どうか、私をひとりにさせて。いまは何も聞きたくないんです。お願いですから、そっとしといてください。

その願いだけが、激しい渇きのように喉をひきつらせた。が、ふだんは口をきいたこともないのに、自分の手柄みたいに興奮して勝手に部屋に上がり込んでくる無遠慮な男たちがいた。いつのまにか、酒も持ち込まれていた。誇らしい出来事が生じると、急に知己や関係者と称する種族がまわりに湧き出してくることを、サナエは初めて体験した。

彼女はとり乱すまい、と自分に言いきかせた。どんな種類の人間にもおごりな応対はできない。だが、無理に余分な言葉を押し出すと、何かが堰を切って奔騰し、抑えた感情が膨れあがって收拾がつかなくなりそうなので、きつく奥歯をかみしめていた。

体は鉛を詰めたように重く、動くと思切れがする。ほとんど何も考えられぬなかで、憤りともくやしきともつかぬ感情が胸を咬んでいた。

昭夫の大ばかもの。前線へは行かないでくれとあれほど頼んだのに、お前は血気にはやって聞く耳を持たなかった。お前は朝子さんを未亡人にしただけでなく、母さんをもひとりぼっちにさ

せてしまったじゃないか。

集まった人たちは、最初のうちサナエの手前を憚って小声のやりとりを交わしていた。けれども、酒がまわるにつれて次第に声高になり、「零戦が爆弾ごと空母にぶつかった瞬間は物凄い音がしたじゃろのう」とか、敷島隊員の大黒繁男については「新居浜の出身じゃそうな。住友の職工をしとったらしいぞい」と得意そうに話し合っていた。

祭壇のそばに坐ったサナエはどこかへ逃げ出してしまいたい衝動に駆られながら、昭夫は自ら志願して体当たりしたのだろうか、と誰にも訊けない疑問を胸のうちに繰り返していた。

翌日は、まだ夜が明けきらないうちから応接に忙殺された。

弔問客を待たせて葬儀屋が祭壇をつくり直すという気ぜわしきで、近所はもとより西条市全体が興奮のるつぽと化していた。愛媛県知事をはじめ、西条市長や在郷軍人、翼賛会、国防婦人会、青年団、中学校、そして国民学校の児童などが表通りから入り込んだ路地のどぶ板をわたって、ひっきりなく訪れて来る。弔問というよりも戦功をたたえる長い行列であった。手狭な家なので、ほとんどの人が土間から居間の正面の祭壇に飾られた遺影を拝み、上がり口で焼香して帰る。サナエは香煙の燦るうす暗い居間の端に端座して、丁寧に答礼した。作法は奉公していた若いころにしっかりと身につけていたが、感情がみだれて粗略にならないように、終始気持をひきしめていた。弔問の足音がとぎれたわずかなひまに裏口へ立つときだけ、足がもつれた。

地元新聞のその日の一面には、豊田連合艦隊司令長官の布告が載せられていた。